

## 若菜、音韻学を学ぶ(2)

中村雅之

### 1. 外国語三昧

新学期が始まって1か月余りが過ぎ、やっと日々の生活にリズム感が出てきた。授業のほとんどが外国語であるのに加えて、家でも毎日、各種言語のラジオ講座を聴いているので、とにかく外国語三昧なのである。中国語学科の必修科目が週に7コマ、フランス語が2コマ、朝鮮語が1コマ、そして英語学科の‘音声学’も受講している。他学科の授業でも担当教員の承諾があれば、8単位までは受講可能なのだ。この音声学、担当はオックスフォードで学位を取ったというシンガポール人で、授業はすべて英語である。余りにも(?)ブリティッシュ・イングリッシュなので、いつも最初は耳が慣れるまでよく聞き取れない箇所がある。しばらく経つと問題なく理解できるようになるが、なぜか毎回最初の3分間は苦労するのだ。高校ではどうしてもアメリカ英語中心になりがちなので、仕方がないのかも知れない。

音声学は英語学科の必修科目なので、他の受講生はすべて英語専攻の学生である。したがって、みんな英語がよくできる学生たちなのだが、必ずしも音声学に興味はないようで、結構簡単な質問にも答えられないことが多い。例えば、[f]はどのようにして発音するか(How is “f” articulated?)と先生が質問しても、誰も答えない。先生は表現を変えて、“How do you articulate the “f” sound?”とか“How is the “f” sound produced?”などと言うのだが、そもそも英語学科の学生といえどもfをどこで発音しているか、つまり調音点はどこかということを経験したことはないのだ。そこで、他学科の学生がしゃしゃり出るのもナンだなあとはいつつ、授業が滞るのもやり切れないので、若菜はそっと手を挙げて、上の歯を下の唇に当てます(Place your upper teeth against your lower lip.)と答えると、かのシンガポール人は、はいそうですね(Exactly!)とニコッと笑ったものだ。仙人から軽唇音化の話聞いた時に、軽唇音は今の音声学では唇歯音(labiodental)と言うのだということ、そして英語や中国語の[f]と日本語の‘ふ’の子音[ɸ]の違いなどについて、詳しい説明を受けたのが役に立った。

### 2. 麗しき五月

フランス語の授業もなかなか刺激的だ。週2回の授業を同じ先生が担当するので、進度が速い。授業では最初の20分はひたすら発音練習をやる。テキスト本文を大声で読み上げるのである。20分という短いようだが、声を出し続けると相当の重労働になる。次の20分は語彙と文法の説明、次の20分は練習問題をこなす。そして、しばしの雑談をはさんで、また発音練習になるのだが、この雑談が楽しい。ある日の話は、先生自身の学生時代の思い出だった。

この先生が通った大学は、今は東京西部の丘陵地帯にあるのだが、先生の学生時代には目黒区の、かつて旧制府立高校だったという古い校舎をそのまま使っていたという。仏文学演習室は建て増しをした4階にあって、窓から小さな中庭を見下ろすことができた。毎年5月になると、中庭の藤棚にうす紫の花が咲いた。その美しい藤棚を見下ろす度に、ハインリヒ・ハイネ (1797-1856) の詩を思い出したものだ、と懐かしそうな眼をした後、ホワイト・ボードにスラスラとドイツ語の詩を書いた。

Im wunderschönen Monat Mai,  
Als alle Knospen sprangen,  
Da ist in meinem Herzen  
Die Liebe aufgegangen.

Im wunderschönen Monat Mai,  
Als alle Vögel sangen,  
Da hab' ich ihr gestanden  
Mein Sehnen und Verlangen.

「どうだい、ここにもドイツ語学科の学生が何人かいるはずだが、さほど難しくはあるまい」という先生の言葉に、若菜は不用意に頷いてしまった。目敏くそれを見つけた先生は、「君、軽く訳してみたまえ」

「あ、はい。えーと、散文的な訳になりますが、‘美しい五月、つぼみが一斉に開く時、僕の心に恋が芽生えた。美しい五月、鳥が一斉にさえずる時、あの人にあこがれと燃える思いを伝えた’……こんな感じでしょうか？」

「よろしい。まさに散文的で色気のない訳だが、文法的には正しく読めている。褒美に、プロの訳を紹介しよう。井上正蔵という人の訳だ」

つぼみひらく  
妙(たえ)なる五月  
こころにも  
恋ほころびぬ

鳥うたふ  
妙なる五月  
よきひとに  
おもひかたりぬ

うん、さすがにプロは違う。別に、張り合う積りはないのだが、こういう簡潔で的確な日本語に触れると、もっと勉強しようと思う。

### 3. 相補分布

日曜日、若菜は金沢中田屋の銘菓‘きんつば’を手土産に仙人宅を訪れた。中田屋のきんつばは母親の好物で、毎月デパ地下で購入しているのだ。仙人は飲み物を何にしようか迷った後で、偶にはコーヒーにしようと言って、苦めのインドネシア産マンデリンをドリップした後、ミルクをたっぷり入れた。うん、きんつばとの相性も抜群だ。

「今日は牙音と喉音の濁音声母についてだ」

「群母と匣母でしたね」

「前期中古音で群母は [g]、匣母は [ɣ] だが、それぞれ韻図の配置はどのようになっているかな？」

「群母は3等韻だけ、匣母は1・2・4等韻だけに現れます。いわゆる相補分布をなしています」

「どうしてそのような分布になったと思う？」

「一番ありそうなのは、群母と匣母がもともと同じ声母だったということではないでしょうか。例えば、古くは [g] だったものが、直音では摩擦音化して [ɣ] になったのに対して、拗音では [g] のまま残った」

「ふむ、まずは、そんなところかな」

「直音だけが破裂音から摩擦音へ変化するのは、よくあることなのではないでしょうか？ 軽唇音化の場合には、摩擦音化したのは拗音だけでしたが」

「そうだな、一般的ではないと思うが、似たような例がないこともない。モンゴル語には古くは破裂音/k/ ([q] と [k]) があつた。それが男性母音/a, o, u/の前では14世紀頃から摩擦音化して [q] > [χ] になったが、女性母音/ä, ö, ü/および/i/の前では18世紀頃まで破裂音 [k] のままだつた。つまり、調音点が奥の方にあるものが先に摩擦音化した」

「なるほど、群母と匣母の例に少し似ていますね」

「さて、仮に君が考えたように、直音では \*g->ɣ- という摩擦音化が起こって中古音の匣母となり、拗音では摩擦音化が起こらずに群母になったとしようか。すると、一つ厄介な問題がある」

### 4. 喻母3等

問題というのは喻母だと仙人は言った。まず、喻母は韻鏡では3等と4等に配置されるが、反切系聯法を反切上字に適用してみると、喻母3等と喻母4等は系聯しない。喻母3等の主な字は‘于・云・王・為・位・羽’、そして喻母4等は‘羊・以・余・移’など。しかも、例えば入声屋韻に圉(于六切)と育(余六切)という対立例があるから、両者は異なる

声母ということになる。

「問題は、喻母 3 等が匣母と相補分布を成しているということだ。それで、実は前期中古音では喻母 3 等は匣母と同じく [ɦ] ではなかったかという論が出て来た。平山久雄 (1967) 「中古漢語の音韻」でも喻母 3 等は匣母と同じという解釈だ」

「えーと、喻母 3 等と喻母 4 等が異なる声母だという所までは理解できたのですが、どうして‘喻母 3 等=匣母’になるのですか？」

「発端は葛毅卿の 1932 年の論文 “On the Consonantal Value of 喻-Class Words” だったらしい。ワシはその論文を読んでいないが、葛毅卿 (1939) 「喻三入匣再證」に説がまとめられている。それによれば、王国維が紹介した切韻残巻の一つである S. 2071 (通称は切三) に雲 (戸分反) と越 (戸伐反) という反切のあることが最大の根拠らしい。‘雲・越’ という喻母 3 等の字に対して ‘戸’ という匣母字が用いられている」

「つまり、喻母 3 等と匣母は系聯する」

「うむ。さらにこの葛毅卿の説に刺激を受けた羅常培 (1939) 「經典釋文和原本玉篇反切中的匣于兩紐」では、切韻以外の資料で喻母 3 等と匣母が系聯する例を列挙した。それによって ‘喻母 3 等=匣母’ という説が一般に広まるようになった」

「あの、確認なのですが、わざわざ切韻残巻 S. 2071 を持ち出すということは、広韻では違うということですか」

「うむ。広韻では雲 (王分切) と越 (王伐切) で、匣母の ‘戸’ ではなく喻母 3 等の ‘王’ が使われている。王仁昉の刊謬補缺切韻および他の残巻も同じだ。原本切韻でも同じであったと見なされている。つまり、S. 2071 の反切は特殊ということだ」

「以前、玉篇は南方の讀書音を反映したものだとうかがいました。切韻残巻 S. 2071 の反切は南方讀書音の影響を受けたものとは言えませんか」

「ふむ、実はワシもそう思う」

「それがどうして前期中古音で ‘喻母 3 等=匣母’ ということになるのでしょうか？」

「分からん。中古音の研究者は原本切韻になかったと思われる増加字や増加小韻を研究の対象から除外する癖に、切韻とは無関係の南方資料を都合よく利用することがある。はっきり言って、ワシには理解できん」

「実際の所、どうなのでしょう。隋代の、例えば陸法言の言語で、喻母 3 等が [ɦ] で発音されていた可能性はあるのでしょうか」

「限りなくゼロに近いな」

「それはまたどうして？」

「前にも言ったことがあるが、7 世紀には声母の清濁を条件とした声調分裂が始まる。その結果、例えば上声全濁音は去声に合流する。匣母は全濁音だから、上声匣母は去声になる。つまり、上声の ‘戸’ は去声の ‘護’ と同音になり、上声の ‘厚’ は去声の ‘候’ と同音になる。いずれも現代では第 4 声だ。しかし、喻母 3 等はどうか。匣母のように全濁音ではな

く次濁音に分類される。そして、上声喻母 3 等は上声のままで去声にはならない。‘有’や‘羽’は今でも第 3 声だ。もしも、切韻編纂の頃に喻母 3 等が匣母と同じだったら、こんなことは起こらない。仮に古い時代に匣母と同じだったとしても、切韻の段階ではすでに喻母 3 等は [h] ではなく、ゼロ声母か [j] のような弱摩擦音だったと考えざるを得ない」

「なるほど、納得です」

「しかし、6 世紀の南方において喻母 3 等が匣母と同じく [h] だったというのは、ほぼ間違いのないだろう。こういう話題の時によく出て来る双声詩というものがある。よく似た声母をそろえた詩だな。次のものは庾信(ゆしん、513-581)の双声詩で、青の網掛けが喻母 3 等、黄色が溪母、他は匣母だ」

問疾封中録

形骸違学宦。狭巷幸為閑。

虹回或有雨。雲合又含寒。

横湖韻鶴下。回溪狹猿還。

懷賢為榮衛。和緩惠綺紈。

「もしも‘喻母 3 等＝匣母’だとすると、溪母の 2 字以外は全て同じ声母ということですね」

「そういうことだな。庾信は他に見母の双声詩も作っているから、こういうのが好きだったのだろう」

## 5. 相補分布、再び

「さて、ここに於いて、匣母は喻母 3 等とも、群母とも相補分布を成すことになった。これをどう考えるべきか」

「中古音よりも前の段階をどう想定するかということですね」

「うむ。前期中古音としては、匣母が [h]、群母が [g] であることは動かない。喻母 3 等については、匣母と同じ [h] とするのが主流だが、すでにゼロ声母か [j] になっていたと考えることも可能だ。中古音研究としてはこれで十分だと言える」

「しかし、それ以前の状況も気になりますね。私が最初に想像したように匣母がすべて [g] に遡るのだとしたら、直音においてはすべて摩擦音化 (\*g>h) したけれども、拗音においては一部分が摩擦音化して喻母 3 等 (\*g>h>j) になり、一部分はそのまま群母 (\*g>g) になったということになって、上手くまとまりません。この問題について、カールグレンは何か解決策を提案しているのですか？」

「うむ。カールグレンは上古音に有声有気と有声無気の 2 種を想定した。匣母は有声有気の g' [g<sup>h</sup>]、喻母 3 等は有声無気の g [g] に遡ると考えた。有気の g' [g<sup>h</sup>] の直音は摩擦音化して匣母になり、拗音はそのまま群母になった。喻母 3 等は g>j となった」

「うーん、何だかとても巧妙ですけど、喻母 3 等以外に有声無気の [g] はあるのではよ

うか？」

「ない。そこが難点だ。かなり歪な体系という印象を受ける」

「この説は認められたのですか？」

「いや、今では多くの研究者は、上古音の段階で匣母に2種類の系列を想定しているようだ。群母と相補分布をなす\*gの系列と、喻母3等と相補分布をなす\*ɸの系列だ。具体的な音価は研究者によって異なる」

「それも何か都合のよい説に見えるのですが、根拠はあるのでしょうか？」

「この問題に関して方向性を決めたのは、プリブランク (Pulleyblank, E. G. 1962 “The Consonantal System of Old Chinese”) とヤホントフ (Яхонтов, С.Е. 1977 “Начальный w в древнекитайском языке” [Jaxontov, S. E. 1977 “Nacal’nyj w v drevnekitajskom jazyke”]) だと言われている」

「えーと、プリブランクの‘上古漢語の子音体系’はよいとして、ヤホントフの‘上古漢語における初めのw’というのは何でしょう？」

「Начальныйは‘初めの’という意味だが、英語の‘initial’に相当する語だと考えると理解しやすい。つまり、Начальный wはこの場合‘頭子音のw’で、上古漢語の体系の中に声母のwを想定すべし、という論文だ。このwというのは、喻母3等と相補分布をなす\*ɸの系列に対してヤホントフが再構した声母だ。プリブランクの\*ɸに対して、ヤホントフは\*wを提案したのだ」

「それで、この二人はどのような根拠で匣母を2系列に分けたのですか？」

「詳しいことはそれぞれの論文を読んでくれ。要点は以下の通りだ」

- ①日本の呉音で、匣母合口をガ行で読むものとワ行で読むものがある。(禍グワ・和ワ)
- ②匣母字は、牙音(k系)と声符を共有するもの(河/可、胡/古)と、ほとんど牙音と声符を共有しないもの(魂/云、緩/爰)の二つの群に分かれる。後者の群はすべて合口である。
- ③初期の仏典では、匣母字を梵語g-にあてる他に、梵語v-にあてるものがある。
- ④ベトナム漢字音では喻母3等がv-になる。このv-は\*w-に遡る。

「まあ、個別の例については若干あやしいものもあるが、匣母が古い時代において\*gと\*w(あるいは\*gと\*ɸ)の2系列に分かれていたとする説は、考慮する価値がある」

「つまり、上古音には\*gと\*w(または\*ɸ)があったが、\*gは直音で摩擦音化して\*w(または\*ɸ)と合流して中古音の匣母になった。一方、\*gの拗音はそのまま群母になり、\*w(または\*ɸ)の拗音は喻母3等になった。そういうことでしょうか？」

「まあ、そういうことだ」

「このような考え方を受け入れた場合、中古音の再構音価に影響はありますか？」

「そうだなァ、例えば、喻母3等をw-と再構した場合、喻母3等がなぜ合口ばかりなのか

が理解しやすくなる。声母に合口性があったのだ。流摂の‘有’や深摂の‘煜’などは、異化作用によって [wɪəu > iəu]、[wiǝp > iǝp] のようになったと考えることができる。少なくとも、有（云久切）や煜（為立切）における反切上字‘云・為’の合口性を無視して [fiəu] [fiǝp] と再構するよりは、よほど筋が通る」

「確かに、喻母3等を [ɦ] とすると、なぜ全てが合口になるのか説明できませんね」

「うむ、実際には、中古音の前段階としては、\*g と \*fiw を想定して、拗音は \*gi- > gi-（群母）と \*fiwi- > wi-（喻母）になったと考える方が自然だが、まあ、これ以上は立ち入らないでおこう。上古音研究というのは魑魅魍魎の世界だ」

「そうなのですか？」

「20世紀末以降の上古音研究は、忌憚なく言えば、ただの知的ゲームになっている。研究者によって再構音価はかなり異なるし、同じ研究者でも発表するたびに提示される再構音が変わることもある。挙句に、提示されたものは抽象的な記号の羅列で、それを見てもほとんど発音することができない。例えば、‘緩’は \*[g]ʷa[n]?などと表記されたりする」

「それは……読めないですね」

「まあ、若い学生が深入りする場所ではない」

「何だか、怖いもの見たさという気分になります、ご忠告に従って、今は止めておきます」

## 6. 影母と喻母4等

「ついでに喉音の他の声母についても触れておこう。影曉匣喻のうち、曉母が [h] であることについては特に問題はない。影母はカールグレン以来、ほとんどの研究者が声門閉鎖音 [ʔ] とする。簡略的にはゼロ声母としても大きな問題はないが、声調分裂に際して、清音として振る舞うことを考慮すれば、[ʔ] としておく方が分かりやすいかも知れない」

「先生の‘ざっくり中古音’では影母はゼロ声母でしたね」

「その方が唐詩などを読む時に余計なことを考えなくて済むから楽なのだ」

「残りは喻母4等ですが」

「これは多くの研究者が [j] としている。カールグレンは喻母3等を [j] とし喻母4等をゼロ声母としたが、その後、喻母3等を匣母と同じ [ɦ] とする考え方が優勢になり、喻母4等を [j] とするようになった。要するに、喻母3等をどうするかで、喻母4等の方も変わる余地がある。しかし、唐代には次第に両者の区別がなくなり、36字母ではどちらも‘喻母’という同じ名称で呼ばれることになる」

「先生の‘ざっくり中古音’では、喻母は3等も4等も [j] でした」

「要するに、影母や匣母と違うことが分かればよいのだ。喻母は次濁音の扱いなので、平声では陽調、上声では陰調だ。喻母入声は後に去声に合流する。匣母入声は陽平声に合流するから、ここでも喻母と匣母は全く異なる」

「つまり、唐代の声調分裂との関連を考慮して、‘ざっくり中古音’では影母をゼロ声母、

喻母を [j]、匣母を [ɦ] として区別したということですね」

「うむ。中古音の声母体系を理解するにはそれで充分だろう」

## 7. 母校にて

数日後、若菜は久しぶりに母校の高校に出かけた。この日は、2年生の希望者を対象として大学受験の総合型選抜の説明会を開くので、若菜も経験者として後輩たちに話をしてくれと頼まれたのだ。今や大学入試の方法は、いわゆる旧来型の一般選抜は全体の45%ほどに減り、推薦型選抜（学校推薦・指定校推薦）と総合型選抜（＝旧AO入試）が過半数を占めている。国公立大学の総合型選抜では共通テストを必須とする所もあるが、若菜が入学した学部では共通テストは不要で、英検2級以上を取得していることと、志望理由書、研究レポートの提出が要件だった。若菜が後輩たちに力説したのは、以下のことだ。

- ①自分の興味や活動が学部・学科の求める学生像にマッチしていること。
- ②志望理由書には、何を勉強したいかではなく、なぜその大学（学部・学科）に入る必要があるかを客観的かつ論理的に書くこと。
- ③志望理由書に書いた研究計画と研究レポートがつながっていること。
- ④面接では、入学後の計画を具体的に説明すること。

生徒たちの質問に答えていると、控えていた教員たちも若菜の説明を感心しながら聞いていた。公立の高校では、教員の側も総合型選抜に関する知識やノウハウが十分でないので、貴重な時間だったようだ。若菜は2年生の春から多くの大学のホームページで募集要項とアドミッション・ポリシー（こんな学生が欲しいという方針）を精査し、SNSを通じて多くの体験情報を仕入れていた。その上で自身も総合型選抜を経験したので、教員たちよりもはるかに豊富な知識を持っていた。

## 8. “サヨナラダケガ人生ダ”

説明会が終わると、国語教師の葵（あおい）先生に喫茶店に誘われた。説明会での汗かき代ということで、和栗のモンブランとアールグレイのセットをご馳走になった。茶飲み話のついでに、前の週のフランス語の授業中にドイツ語学科の学生と間違えられて、ハイネの詩を訳させられたことや、プロの翻訳は凄いいということなどをつれづれに話していたら、井伏鱒二（いぶせますじ、1898-1993）の話になった。

「于武陵（うぶりょう、810-?）の‘勸酒’という詩を覚えてる？」

「先生の授業で読みましたね」

勸君金屈卮	君に勧む 金屈卮（きんくつし）
満酌不須辞	満酌 辞するを須（もち）いず
花発多風雨	花発（ひら）けば 風雨多く
人生足別離	人生 別離足（た）る

「これを井伏鱒二が日本的な七音と五音のリズムで訳した」

コノサカヅキヲ 受ケテクレ  
ドウゾナミナミ ツガシテオクレ  
ハナニアラシノ タトヘモアルゾ  
「サヨナラ」ダケガ 人生ダ

「最後の部分が有名ですね」

「漢詩を七五調や五七調で訳すのは、江戸時代からあった。でも、この井伏訳はもとの漢詩の意味を押えつつも、まるで都々逸のような、三味線で歌いたくなるような味わいがある、うけた。」

「同じ七五調とは言っても、ハイネの詩の井上正蔵の訳とはだいぶ趣が違います」

「井伏鱒二の方がむしろ特殊じゃないかな。明治の世になると、西洋音楽の教育が始まって、海外の民謡に日本語の歌詞を付けて小学校や中学校の唱歌として歌わせるのが流行った。その際の歌詞もみな七五調だった。日本人にとって詩といえば七五調なのだろうね」

「井上正蔵の訳もその伝統を引き継いでいるということですか」

「あなたが高校の時に読まれた上田敏（うへだびん、1874-1916）の『海潮音』もすべて七音と五音のリズムだったでしょう」

「そうでした。ヴェルレーヌやブッセの詩も全部七五調でした」

「大正生まれの井上正蔵（いのうえしょうぞう、1913-1989）も当然、その伝統を引いていることになる」

「私のようにハイネの詩を散文的に訳したら、色気がないと言われても仕様がなか」

「十代の娘にそこまでは期待していないでしょう。むしろ、その後の‘文法的に正しく読んでいる’という評価の方を素直に受け入れることね。何しろ、明治の翻訳はあまり正確には訳されていない。もちろん、意図的にだけど」

「そうなのですか？」

「例えば、里見義（さとみただし、1824-1886）の訳したアイルランド民謡‘庭の千草’とかイングランド民謡‘埴生の宿’の歌詞は和風に修正されているし、稲垣千穎（いながきちかい、1847-1913）が詩を付けたスコットランド民謡‘蛍の光’なんかは原詩とは関係なく軍歌として創作されている」

「軍歌ですか？」

「知らない？3番には‘一つに尽くせ、国の為’とあるし、4番には‘千島の奥も、沖繩も、八洲の内の、護りなり’とある。海軍兵学校で歌われていたものらしい」

「ふえー、おどろき」

「これらの歌詞もすべて七音・五音で書かれている。もう日本人に染み付いたリズムなのだね。面白いことに、戦時中には海外の音楽が禁止されていたのだけれど、これらの歌はすでに馴染んでいたこともあって、禁止唱歌から除外された」

「そりゃあ、‘一つに尽くせ、国の為’と歌われたら、禁止できませんよね」

「その上、20年ほど前には、文化庁と日本PTA全国協議会が選定した‘日本の歌百選’に蛍の光も選ばれている。PTAは3番と4番の歌詞を知らなかったのか、なかったことにしたのか」

「歌に歴史あり、ですか」

## 9. 類隔切

日曜日、いつものように仙人の家へ行くと、仙人は玄関の前で洗面器を片手に、打ち水をしていた。その日は、5月には珍しく猛暑日になったので、涼を求めてのことらしい。何だか江戸のご隠居が長屋から出て来たような風情だ。若菜を見ると、「おお来たか。暑いな、麦茶でも飲もうか」と言って家に入って行った。

「織田氏に焼き討ちにされた恵林寺の快川(かいせん)和尚は‘心頭滅却すれば火もまた涼し’と言ったそうだが、われら俗人はなかなかその域には達しないな」

「ふふ、その言葉とは裏腹に、とても涼しげな表情をされていますよ」

「なあに、やせ我慢さ。さて、しばし暑さを忘れて、学問に精を出すとするか」

「今日のテーマは何でしょう？」

「舌音と歯音の声母だ。まずは舌音から見てみよう。36字母で言うと、端透定泥と知徹澄娘だ」

「‘ざっくり中古音’では、端[t]、透[tʰ]、定[d]、泥[n]と知[tʰ]、徹[tʰ]、澄[d]ですね。娘母は泥母と同じということでした。端透定泥については、現代音から見ても特に違和感はありません。問題は知徹澄娘でしょうか」

「うむ。20世紀初頭に敦煌で発見された唐写本の中に‘守温韻学残卷’と呼ばれているものがあって、その中に36字母の原型たる30字母が掲載されている。その中の衍字や誤写を正して、整理したものを掲げると、以下の通りだ。喉音に心母と邪母が含まれるなど、後の36字母と違う点があるが、そこは今問題にしない。この写本について詳しく知りたければ、遠藤光暁(1988)「敦煌文書P2012「守温韻学残卷」について」を見てほしい」

唇音 不芳並明  
舌音 端透定泥 是舌頭音  
知徹澄日 是舌上音  
牙音 見溪群來疑 等字是也  
齒音 精清從 是齒頭音  
審穿禪照 是正齒音  
喉音 心邪曉 是喉中音清  
匣喻影 亦是喉中音濁

「唇音で重唇音と軽唇音の区別がないのですね」

「そして、娘母と牀母もない。それで、36 字母よりも 6 字母少なくなる」

「舌上音が‘知徹澄娘’ではなく、‘知徹澄日’ですね」

「うむ。前期中古音で日母が口蓋化した鼻音 [ɲ] だったことは前に説明したかな。後期中古音では非鼻音化によって [ɲʒ] になり、その後 [ʒ] を経て [z] となる。この 30 字母が作られた段階では純然たる鼻音だったと考えていい」

「この 30 字母はいつ頃作られたのですか？」

「正確なことは分からない。しかし、非鼻音化も軽唇音化も起こっていない段階だから、7 世紀前半かそれ以前ということになる。ただし、この写本が書かれたのは唐末頃だろう。他の箇所には、類隔切の例として重唇音の字に軽唇音の反切上字が用いられる例が挙げられている」

「その、ルイカクセツというのは何ですか？」

「被切字と反切上字の声母がピッタリと合わないものだ。前にも言った通り、広韻には重唇音の被切字に対して、軽唇音の反切上字が用いられる例が非常に多い。鄙（方美切）・眉（武悲切）などだ。守温韻学残巻ではそれらを類隔切だからしっかりと区別すべしとっている。つまり、この写本が書かれた時代にはすでに重唇音と軽唇音が区別されているのだ。30 字母はあくまでも伝統的な声母の体系として提示されているに過ぎない」

「それで、この 30 字母に何か音価に関わるヒントがあるのでしょうか？」

「大ありだ。口蓋化した鼻音である日母 [ɲ] と知徹澄が並べられているということは、30 字母が出来た時代には、知徹澄母も口蓋的な子音だったということだ」

「あ、なるほど。だから、知 [t̪]、徹 [t̪ʰ]、澄 [d̪] になるのか」

「そう考えれば、知徹澄日という配列が自然なものに感じられるだろう。カールグレンは方言音などから、舌上音を [t̪] などの舌面音としたのだが、実は、これらの舌上音をそり舌音に再構する研究者もいる。発端は羅常培 (1931)「知徹澄娘音値考」だ。この論文では、梵語音の漢字音訳において、舌上音が梵語のそり舌音に当てられていることを根拠として、中古音の舌上音をそり舌音だとした」

「梵語では [t̪] の他に、口蓋化した [t̪] とそり舌の [t̪] があるのですか？」

「いや、普通の [t̪] とそり舌の [t̪] の 2 種類しかない」

「ん？すると、梵語の [t̪] と [t̪] に漢語の端母と知母が対応している、ということですか？」

「その通りだ」

「しかし、単に対応していることからといって、音価が決定できるのでしょうか。例えば、ロシア語の В [v] を日本語ではワ行で表す習慣です。モスクワ (Москва) のように。でも、だからと言って、日本語のワ行が [v] だということにはなりませんよね」

「同感だ。梵語の [t̪] と似て非なる音に対して、漢語で [t̪] と似て非なる知母を当てただけなので、羅常培の説は論理的に成り立たない。やはり、舌面音の知 [t̪]、徹 [t̪ʰ]、澄 [d̪]

とするのが穏当ではないかな。平山久雄（1967）「中古漢語の音韻」でもそのように再構している。ただし、平山は娘母においても [n] としている」

「先生の‘ざっくり中古音’では娘母は泥母と同じ [n] でしたね」

「現代音で端透定と知徹澄が明瞭に異なっているのに比べると、泥母と娘母は全く差がない。その上、切韻の反切でも泥母と娘母が完全に区別されているとは言い難い状況なので、ワシは区別しない立場なのだが、正直に言うと、どちらでも構わない。」

「つまり、泥母と娘母は反切において系聯するということですか？」

「そういうことだが、その数例を例外と見なせば、分ける立場もあり得る。厄介なのは、そもそも舌音には類隔切が非常に多いということだ」

「具体的にはどういうことでしょうか？」

「例えば、広韻において、椿（都江切）では知母の被切字に対して端母の反切上字を用いているが、このように舌上音の被切字に舌頭音の反切上字を用いる類隔切が羅常培（1931）には17例紹介されている。原本切韻まで遡れば、さらに5例増える。それらの3分の1が泥母だ」

「例外というには、かなり多いですね」

「とはいえ、初期の30字母で舌頭音と舌上音が区別されている以上、端透定と知徹澄は区別せざるを得ない。娘母は30字母にないから、特に分けなくてもいいだろうという訳だ」

「これだけ類隔切が多いというのは、何を意味するのでしょうか？」

「要するに、6世紀にはまだ舌頭音と舌上音が分離していない方言があったということだろう。前代の韻書を参考にした切韻にはその名残があるのだ」

## 10. 齒音

「韻鏡では1等と2等が直音、3等と4等が拗音というのが原則だ。4等韻に関しては、前期中古音では直音だったが、唐代に拗音化したので、4等欄に収まった。ところが、舌音の配置は少し変わっていて、1等と4等が舌頭音、2等と3等が舌上音だ。つまり、舌頭音のうち、拗音だけが舌上音に変わったと単純化できない。しかし、2等韻の生成は、上古音研究における重要テーマになるので、ここではやらない」

「またしても上古音ですか」

「とりあえず、韻図における分布を頭に入れておけば、それで十分だ。そして、同じような分布は齒音にもある。1等と4等に配置されるのが齒頭音（精清從心邪）で、2等と3等が正齒音（照穿牀審禪）だ」

「先生の‘ざっくり中古音’では、精 [ts]、清 [tsʰ]、從 [dz]、心 [s]、邪 [z] と照 [tʃ]、穿 [tʃʰ]、牀 [dʒ]、審 [ʃ]、禪 [ʒ] ですね」

「齒頭音の精清從心邪については特に問題となる点はない。現代音でも、直音ではピンインの「z-、c-、s-」で、拗音では「j-、q-、x-」になる」

「なるほど」

「しかし、正歯音については考えるべき問題がいくつかある。まず、正歯音の2等字と3等字は、反切上字がほとんど系聯しない。しかも、3等韻には正歯音2等と正歯音3等の両方が含まれる」

「ということは、声母が違うということですか？」

「カールグレンはそう考えた。正歯音2等をそり舌の [tʂ] など、正歯音3等を舌面音の [tɕ] などに再構した。審母に例にして、カールグレンの再構音を見てみようか。正歯音2等が2等韻にも3等韻にもある点に注意して欲しい。音価は例によって、グラマタ・セリカ・レケンサ (GSR) のものだ」

殺 (所八切) 黠韻審 <sub>2</sub> 母 (2等韻)	ʂät [ʂät]	GSR. 319d
殺 (山列切) 薛韻審 <sub>2</sub> 母 (3等韻)	ʂjät [ʂjät]	GSR. 319f
設 (識列切) 薛韻審 <sub>3</sub> 母 (3等韻)	ʂjät [ɕjät]	GSR. 290a
薛 (私列切) 薛韻心母 (3等韻)	ʂjät [sjet]	GSR. 289e

「‘殺’は韻鏡に見えませんね」

「審母2等にはすでに‘殺’があるので、入れる余地がなかったのだろう。あるいは、韻鏡の時代にはすでに直音化して、殺と同音になっていたのかも知れない」

「直音化ですか？」

「審母2等の字はすべて唐代に直音化したから、2等欄に配置されたのだろう。この考え方は三根谷徹 (1953) 「韻鏡の三・四等について」で提案されている。その考えに沿って、前期中古音から後期中古音への変化を示すと次のようになる。ただし、声母以外は平山久雄 (1967) の方式で示す」

殺	[ʂjät] > [ʂät] (2等欄) *殺と重なるため、実際には登録されていない
設	[ɕjät] > [ʃjät] (3等欄)
薛	[sjet] > [siet] (4等欄)

「審母3等が ɕ > ʃ になるのですか？」

「正歯音は後に全てそり舌音化するので、唐代はその途中段階として、舌面音から舌尖的調音に変わったという推定だ。三根谷の考えでは、ɕ と ʂ では違いが大きい、ʃ と ʂ なら36字母で区別せずに同じ字母を用いたのも納得できるだろうという訳だ」

「でも、前期中古音によったと思われる30字母でも、すでに同じ字母で表していて、正歯音の2等と3等は区別されていないですよ」

「そうなのだ。つまり、30字母の作成者は正歯音の2等と3等を区別しなかったが、一方、切韻の反切では正歯音の2等と3等を区別している。これをどう考えるかだ」

「可能性だけから言えば、前期中古音で審母3等を ɕ、審母2等を ʃ と再構してもよさそうですね」

「ふむ、そのように再構すると、いくぶん違和感は和らぐ。30字母の作成者は ɕ と ʃ を区

別せずに審母としたが、切韻の反切では狭い介音-i-を伴う e には‘式・書・識’などの反切上字を用い、直音および緩い介音-i-を伴う f には‘所・山・生’などの上字を用いた。反切上字を分けたのは、韻母との相性から、口唱の滑らかさを求めたため、必ずしも違う声母と認識していたためではなかった。そういう推定は可能だ。それでも、カールグレンの再構した声母の体系と大きく異なる訳ではない」

「そうですね。審母 2 等を ʂ から ʃ に修正したとしても、体系に大きな影響はありません。しかし、カールグレンや平山久雄のように正歯音 2 等を [tʂ] [ʂ] などのそり舌音、正歯音 3 等を [tɕ] [ɕ] などの舌面音とすると、それらを区別せずに同じ字母で表すというのは、やはり少し違和感があります」

「それはそうなのだが、同じようなことは後にも起こったのだ」

「というと？」

「清代に満洲文字で漢語音を表記した際に、破擦音のそり舌音と舌面音を区別しなかった。例えば、‘章’と‘将’は jang と jiyang のように表記された」

「介音-i-の有無で、そり舌音と舌面音を区別したのですね」

「ただし、これは漢語話者ではない満洲人が採用した表記法であるから、30 字母や 36 字母と同列に扱うことはできないかも知れない。ちなみに、19 世紀到北京語の教科書『語言自邇集』を著した英国人ウェード (Thomas Francis Wade, 1818-1895) のローマ字表記でも、‘章’と‘将’はそれぞれ chang と Chiang になっていて、満洲文字と同じ発想だ」

「面白いですね。少なくとも非漢語話者にとっては、そり舌音と舌面音を区別しないのは必ずしも珍しいことではない」

「うむ。‘櫟 [ʂiet]’と‘設 [ɕiet]’を仮に 30 字母の作成者が頭の中で /ʂiet/ と /ɕiet/ のように声母は同じで介音が違うと認識していたのであれば、満洲文字やウェード式ローマ字と同じ態度ということになる。しかし、櫟 (山列切)・設 (識列切) という反切を見ると、明らかに声母の違いと認識している」

「結局、再構音価を少しぐらい修正しても、問題の本質は変わらないということですか」

「そうだな。考えられる可能性としては、切韻の反切は 6 世紀の状況を反映したもので、30 字母はやや遅れた 7 世紀前半の状況を反映したものである、ということかな」

櫟 [ʂiet] > [ʃat]

設 [ɕiet] > [ʃiet]

「7 世紀前半には同じ声母になっていたので、30 字母でも同じ字母ということですね」

「この想定を裏付ける積極的な根拠はないのだが、論理的にはかろうじて辻褄は合う」

## 11. 切韻と韻鏡

「切韻の反切と韻鏡や 36 字母の体系にはかなり相違があるということですね」

「カールグレンの頃には、切韻を唐代長安音を反映するものとして、諸方言や外国漢字音

を総動員して中古音の再構を試みたのだが、研究が進むと資料ごとの体系のズレが認識されるようになった。有坂秀世（1939）「カールグレン氏の拗音説を評す（四）」における4等韻直音説、三根谷徹（1953）「韻鏡の三・四等について」における正歯音の音価の変遷に関する仮説、あるいは水谷真成（1957）「唐代における中国語語頭鼻音の Denasalization 進行過程」における非鼻音化の考察によって、今では切韻と唐代長安音の体系には大きな相違があるという認識が一般化している。Pulleyblank（1970, 1971）“Late Middle Chinese”が、切韻の体系を前期中古音（Early Middle Chinese）、唐代長安音を後期中古音（Late Middle Chinese）と命名して以来、その用語が広く用いられている」

「韻鏡も後期中古音の資料ということですか？」

「一応そういうことになる。後期中古音の中心資料は慧琳の一切経音義の反切、日本の漢音などだが、韻鏡の韻母体系も後期中古音に基づくものと見なされている」

「唐代に正歯音2等の字が直音化したというのも、韻鏡で2等に配置されていることが根拠なのですね」

「うむ。単純に考えた場合、1等と2等が直音、3等がゆるんだ-i-介音、4等が狭い-i-介音を持つというのが、最も分かりやすい」

「2種類の拗介音については、重紐のところでも少しやりましたが、まだ完全に吞み込めていない所があります」

「それは次回にでもやろうか」

「お願いします」

## 12. 学問三昧

仙人の家に通うようになって半年余りになるが、4月以降は内容がかなり高度になってきた気がする。高校生時代には仙人の話をのんびりと聞くだけだったが、最近は専門的な論文が次々と話題に出るようになった。日本語と中国語だけでなく、英語・ドイツ語・ロシア語の論文もある。きっと、大学生として扱ってくれているのだ。仙人は、専門家になる訳ではないのだから気軽にやれと言っていたが、その割には内容が深すぎないか？

大学に入ったらアルバイトもしようと思っていたのだが、授業の予習に、ラジオ講座に、仙人の講義、とにかく学問三昧で余計なことをする時間はない。疲労困憊の日々だが、充実していることは確かだ。学問こそが学生の本分だ、と思うことにしよう。